

郷土史資料集(2)

# 郷土能野焼



西之表市立図書館

# 序

郷土史資料集の第二輯として、「能野焼」を刊行する。

能野焼の由来、特徴及び種類、さらに丹念な図写、多くの写真を添附して能野焼の大体を系統だてた点に、資料としての意義があり、同時に郷土に住む者の能野焼に対する深い愛情を感得することが出来ると思う。

著者浦添助直氏(鴻峰小学校長)が苦心の原稿を快よく貸与され刊行を御承諾下さった事に対して深く感謝の意を表するものである。

## 能野焼の由来

西之表市立図書館長

古市 清香



# 郷土能野焼

## もくじ

一 能野焼の由来	二
二 能野焼の種類	七
三 能野焼の特徴	一四
四 能野焼の保存	一六
五 中種子焼	一七
六 能野焼復興策	一七
七 結び	一八





# 郷土能野焼



## 一 能野焼の由来

能野焼がいつの時代に、どのようにして始められたのか。

正確を示す史料は発見されていない。ただ島津一つの古典ともいえる「種子島家譜」にありありと史実の一端を見出すことが出来る。曰く、宝暦三年（一七五三）能野の次兵衛陶治の功を賞じて能野氏をあたえ足軽となす。享和元年（一八〇一）能野七郎次自製の陶器を納むるをもつてこれを郷土となす。文化十年能野の権蔵を以て一世足軽となし小浜氏を与う。陶器の功を以てなり」と。

鹿児島大学教授陶器研究室新野勉先生は宝永一正徳（一七〇四—一七一五）が開窯しているように述べている。「能野焼は苗代川五本松の系統ではないかと思われる。当時は笠野原移住（一七〇四）が終わり、竜門司第三窯（一七三〇）琉球陶工来、苗代川一翠年苗代川窯

の説、宝永一正徳（一七〇四—一七一五）に開窯しているとしても、たゞしい時代のずれは感ぜられないようである。三宅先生の説、「江戸初期の開窯で、上器が進歩したものと、南蛮焼しめ糸、朝鮮糸の二つの要素が、現有する焼物から推察することが出来る」という説を取りあげると、その出来は混沌として興味つきないがある。

専門家の説、さらに史実、作品からおして一七〇〇年頃は開窯されていたと断定することが出来る。この土地の長老の語りでは、「伊集院苗代川より陶工が渡島し、この業をはじめた」という。現在二代院工の墓として、地元業主の墓地に残っており、風化した墓石からなんの資料も得られないが苗代川と密接な関係にあることは事実のものである。後述、能野焼がその起源はいずれにもせよ、苗代川焼と深いつながりがあるとすれば、苗代川の起りについて述べる必要がある。

話は速く通つて加藤清正の朝鮮征伐から始めなければならぬ。一回を文祿の役（一五九二）二回を慶長の役（一五九八）という。この二回の戦いを「征韓の役」と呼び、別名焼物戦争と呼ばれている。この戦が終了までに要した年月は実に二〇〇年といわれ、要した兵力一五万八千余、国内にとつても大きな衝激があった。当時夫やわが子を戦いに失ひ、その

保護を島津藩が中止するという多難な年で、ちやうど五本松窯も使用不能になった年代であるから、能野が五本松系統と目される背景はそろっている。」と。

日本工芸師三宅忠一先生は、実地調査の結果、つぎのように述べている。「江戸初期（一六〇〇）あるいは慶長年間（一六〇〇）に直接朝鮮人陶工によってもたらされた窯であったものと推定する。朝鮮征伐のあり種子島氏が出陣されたことは史実によつて明白であり、その当時他の大名に見られる如く、直接朝鮮から陶工を従えてきたのではないかと、現有する能野焼を助三点の口づくりが、朝鮮のご古い技法と全く同じものが見られる。又六つつの窯跡は朝鮮系の登り窯である。」と。

能野焼窯跡の祠に「弘化四年（一八四五）本性坊」とあり改築窯のあり、当時の陶工が銘記したのではないかと推測される。

現有する能野焼に、享保元年（一七一六）延享二年（一七二五）と銘記されたものがある。これによれば、新野先生

悲しさを綴つたと伝えられる、川内久見崎に残る「想夫恋」に、「殿をぬかぬ涙はいでぬ、みたま参りに益歸り、哀の切切たる抒情詩の中に、当時の未だ人のあわれな情景を想像することが出来る。多大な衝激もさることながら、反面大陸の文化がわが国にもたらされたことも大きな収穫であった。中でも、「焼物戦争」という名にふさわしく焼物に関する様々な文化が導入された。史実の中に、「当時促えてきた朝鮮人は百余名」として記されているが、その大部分は陶工であったといふ。

「征韓の役」に郷土種子島家譜十六代久時も四回にわたりに陣している。「種子島家譜」この史実から三宅先生の直接朝鮮から陶工をつれてきたという説も考えられる。

十七代島津義弘は陣指揮をとり、赫々たる武勲を立ててかえつてきたが、多くの陶工を従えて薩摩にかえり、窯業に従事せしめた。これが薩摩焼の発端となり、凡そ三百五十年前よりはじめられたことになる。

出水野に上陸した朝鮮人陶工は、伊集院苗代川に居住させ外部との交流をとり、島津の密接のもとに、一般用の器具を作らせた。しかも、絵入りや、模倣入りは禁止し、釉薬の加減による変化のみとした素朴な器物が三百年間、外部とたう切つた中に独自の焼物が作られたことになる。飾りけのない

男性的な、どっしりした朝鮮風の作りかたが、こ、苗代川の特徴といえよう。

嘉永元年（一八四八）普通通信に、「遠キ以前ヨリ肥前焼物ノホカ他國製ノ焼物ヲ輸入スルコトヲ禁ゾオキタルニ、近來マタマタ内密ニ輸入スルアルヲ以テ嚴禁ス。薩摩の人達は、いばば黒ゾカ以外は使用出来なかつたことになる。生活に必要なものはなんでもつくられた。

伊集院より陶工がいつ島に渡つてきたかは明らかでないが、一代陶工の墓が当地にあるところから、渡来は事実であるが、（弘化四年）本姓坊なる人か今尚不明にふられている。一七〇



風化されてただ  
原形をとどめるの  
みである。  
伊集院より渡来  
したといわれる一  
代陶工夫婦の墓

発見されたことは事実である。

一代陶工は日用雑器製作に専念し、一生をこの地で度す、その夫婦の墓が今尚保存されている。風化された墓石は、年令、年号、氏名は皆目わからず、史料を正すことは出来ない。二代陶工が再び伊集院より渡来し、一代陶工の志をついで、日用雑器を作っていたが、こまめな生業に不満をもち、たまに種子島經貫道路の開通工事が行われたので、道路修用水用土管製造に方向を転じようとして、従来の焼窯を取りこわし、大型のものを改良し、土管製造にとりか、つた。多額の経費を投じて再築した窯であったが、土管の製法芳しくなく、海外移出計画も水泡と化し、その大望はくずれかけた。この衝激によって二代陶工は昔の如く木土へ逃すかえったという。後に残った地元従業員は、再興をこころが、乏しい生活の中にあつては話方なく、年に一人去り二人去りして、その姿を消してしまつた。往時風びした島の一大産業もこ、において終止符をうてしまつた。時恰も明治三十五年頃（一九〇二）といわれる。

古老はさらにことばを続けて、「自分達が青年時代に、焼物用薪木伐採に度々おもむいたことがある。当時の焼窯の情景は、まだはきりと記憶に残っている。粘土を運ぶ人、杖をついて粘土を足踏みする人、葦垣の下で、ロココを頭を

〇年頃開窯し、陶工の渡来によりはじめられたとすれば、本姓坊は一代陶工ではありえない。一四〇年の時代のずれがある。

地元長老遠藤孝助翁九四才はこう語る。「その昔一代の陶工が苗代川より渡来



熊野焼 七 輪

し、今の住吉熊野部落に窯を築き、地元の人々を拜して焼物をはじめた。焼物は日用雑器にわたり、つば、花びん、食器、仏具等におよんだ。「つばや牧」といって、ひろい山林が従業員たちにあたえられた。従業員はかたわら農事を営みながら断業に専念した。税は焼物を納め民間にあつては物々交換が行われ、一つの器物に穀物を入れ、それに満ちた量が交換条件であつた。従つて一升のつばは一升の穀物が交換の対象となつたのである。当地産は勿論、同市安納に「つばや宿」というものがあり、焼物を販売するための専用宿であつた。全島に焼物は流布し、更に歴久島、遠く沖繩まで木帆船で焼物を運び交流されたようである。熊野焼窯元といわれる熊野家より琉球通宝が発見されたが、貿易の交流によつてもたらされたものか、琉球陶工が持参したものか明らかでないが、

大小芸的に持柄が定められており、無器用な者は、成形の片には番が当りなかつた。そして同日かたつて作品が出来上ると窯に入れ、夜を徹して火を入れた。記憶では三十一四日焼きをはつてはなからうか。焚口には役など、三、四名の若者が話を口になみながら笑い興じていたことを思い出す。

焼物を試みて、熊野の姓をいただいたという宗元の八五才になるおぼあさんは、一部分がこの家に嫁入りした当時、伊集院の人だという陶工が同宿していた。名前が忘れてしまつたが、焼物の大行だといつていた。又一代陶工が持参した花ざしたという白ざつま焼を見せられた。当家の先祖は一流





竈後に祀られている竈

の技術者であったといわれるが、こゝにどつしりとした偉大なソテツを挿した花びんが床の間におかれてある。当時能野焼に従事した地元の人々は、能野姓を名の者四、遠藤一、日高一、上妻一となっているが、その他にもいたようである。現在能野部落民生委員の能野繁栄八氏七二才は、「自分は能野家に養子入りしたのであるが、能野焼がとだえた後、父は自分の家に小型の竈を築いて竈につける岩石を焼いていた。父は口癖のように焼物をはじめたいといっていたが、同志がななく口口用材を集めたまゝ、眼をこらしてしまつたが、出来れば復活したいものだ」と。

往時宮まわつていた場所に、ツボヤ神社と名づけられる跡がある。焼物で作られた高さ五十程の小さな竈であるが、こ

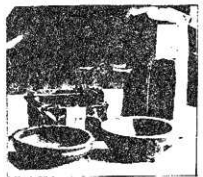
れ、わずかに往時のなごりをとゞめるのみである。

## 二 能野焼の種類

苗代川の特徴として、生活に必要な日用器具はほとんど作られたことをあげたが、能野焼においてもそのことが言えるようである。焼物を入れる様々な形、大きさの違いなどが印象的である。この種のもものは今尚大部分の家で使用されている。第二は花立て、花びんが圧倒的に多く、この形や大きさも様々である。こゝで苗代川と違う点は、無地なものも多いが、色々な模様や絵入りが多いということである。さらに鳥獣の素材がつかわれソテツを模した花びんが色々工未きに独り。横線のひき方にしても直接があり、曲線があり、さらに松竹梅等をモチーフとしたもの、往時陶工の創造力に感激させられる。焼物秘法とされている「二重すかし彫り」の花びんも見られるが、苗代川の不自由な条件の中に當まれたのに対して、自由に様々なものが作られたことが一つの特徴であろう。「ツボヤ牧」という山林があたりたこと、陶工の功を賞して氏をあたえ、足軽や郷士に取りたて、いる所から保護のもとに保護されながら宮まわつていたもようである島の生活に必要なものは、悉く作られ生活の要に供していたものと思う。



(1) 食器類  
この種の器物は数少ない。これは日川器具の内でもっとも使用されるものである。他の器物以上粗写数が作られたものと考えられる。現有物があまり見られないことは使用量が激しい上に破損しやすいためだろう。



(2) 仏具・焼香  
各家庭に多く見られ、今尚使用されている。形もいろいろと工夫がなされ大ききも大小様々である。

の嗣の中に「弘化四年本性坊」という記事が見られる。廣大教授新野先生の説で「本性坊が能野焼の修業者である」とすれば、一体どのように解釈すればよいか。本性坊を一代陶工年(二七一六)の銘が入っていること、又家譜に宝曆三年(一七五二)陶治の功を賞じて能野氏を与えられた記事に比較して、一代陶工の来島は、能野焼開業から百二十年のずれが考えられる。従つて以前に島焼得の焼物が宮まわつていたという説がなりたつた。又二代陶工であるとするれば、二代目は失敗して逃げかえつた時代は明治三十年頃になるので、弘化四年とはおよそ六十年のずれがあるので、これも考えられない。しからは本性坊なる人は一代陶工でありその以前から焼物が行われていて、新しい技法を伊集院よりもちきたり能野焼に一段のよさをあたえた人であるのか、あるいはたんなるお坊さんで火の神を祀つた人なのか、このへんに研究の余地があるようである。

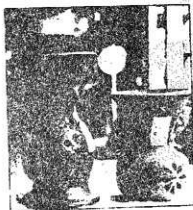
史乘によつても明らかなく個人窯でなく、数人による共同経営であつた。陶器の功により能野氏、小浜氏などをあたえられた記事が残っている。

当時焼物に従事していた人々の子孫は、今尚年の初めに集い、ツボヤ祭を行つている。荒廃した共有地には竈がまつら

次に、かける写真は現有物の一端であるが範圍のひろさがうかがえられよう。

(6) 花びん (盆室作)

大小様々なこの種のものは形に意匠のみが認められる。更にこれらに梅、唐草などの図様を刻んだものもある。数は多い。



(7) 二重メカシ化びん

この種は現存物は3点のみ。うち1点は市文化財に指定されている。高度の技術を要するもので現在でも桜はとされてゐる。



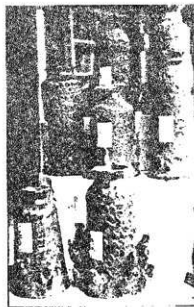
(8) 片口・サイロ

片口の利回りは大きい。酒、醤油、酢等のはかりや容器に入らねどなくてはならないものである。サイロは茶し物に利用されたと考えられるが釣鐘の茶しびんがあるがそれらに使用されたものだろう。



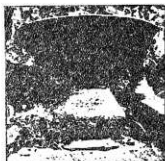
(9) 壺・徳利

小さな壺、大小の徳利の一部である。この種は数多く見られる。いろいろと工夫され様々な形状のものがあつたり。次を作つたりしたものがある。



(10) 花びん・ソツツ

視野狭の作品を代表するものと見える。ソツツは存在した陶工の創造力に驚く。この種のものは気候による乾燥の多いので形にもいろいろ変化が見られる。



(10) 花びA

Mのひろい典影的な花びAであるが、陶器としては高度の技法だといわれる。  
故有山長太郎氏も驚嘆したといわれる。



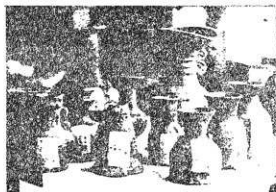
(11) 動物像

彫刻、漆、陶等のものが神社やお寺などに残っている所から、供養物に奉納されたものと考えられる。この像、人物、花などがある。



(8) 器台 (其の1)

宮々とした二段構えのもの、元能野  
悦宗元の光世に多く見られる。中には  
年号を付したものがある。

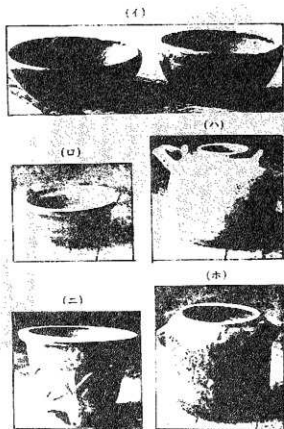


(9) 花立て

自由に形を工夫した種々な花立て。  
どっしりとした男性的な美が感ぜられる。

(2)は仏具で、碗と焼香用器であるが、現在数多く見られる。(3)は

図(1)は食器・茶器であるが、現存するものは数少ない。日常生活には欠くことのない器具だけに数が見られないというものは、使用度が激しく破損し易いので、現物は見られない。



(14) 日用雑器

- (イ) 皿
- (ロ) 鉢
- (ハ) キュース
- (ニ) 花鉢
- (ホ) セイロー



(12) 磁石(其の2)  
— 焼燗まと丸物である。  
これらも古い家柄の墓に多く見られる。



(13)  
熊野節葬場(場)に放置されている花立てである。無傷のものは少ないが、今尚数多くの焼物(物)が散乱している。

片口であり醤油、酢、焼酎等のはかり入れに使用された。片口は古い家には今もよく見られる。中央の器物はセイロ・蒸し器として使用された。(4)は様々な種類であるが形も一つ一つ違い大小様々である。これも各家庭に多く現在も使用されている。この種には横線が入っているが、波状線は南方系の手法だと、ある専門家は指摘された。直線系は朝鮮系であり、苗代川系統のものといわれ、外に年号入り、氏名入りがあるのもこの種のものに限っている。(5)はソテツを素材とした花びんである。形の工夫が丹念になされ一つ一つにそのよさが感ぜられる。重々しくどっしりした男性的な素朴さがすなおに表現されている。(6)は5と同様地域から取材した竹である。これにもいろいろと形に工夫が見られる。孟宗竹に似せて節を入れてあるもの、入っていないもの、節がた、更に樽、松の絵入りなどがある。(7)は二重スカシ彫りの花びんであるが、おそらく武家使用のものではなかつたらうか、現今陶業界において秘法とされている技法の一つであり、こうした作品が当地に見られるということは、往時熊野焼の技術の高さを示す一つの証左ともいえる。この作品は数少ない、現存物は数点にすぎない。(8)は焼物で出来た磁石、一段横えの立派なものであるが、熊野姓の元祖墓に見られる。こ



れにも様々な形が残っている。(9)は花立て、大小様々な形、全く同一のものも珍しい。この種がもっとも多く、能野焼の現有する大部分はこれである。首のかざりにしても、ゼンマイ、クサリ、環等いろいろな手法が見られる。(10)は一代陶工夫婦の墓前に置かれていた花びんで、上部をひろくひろげる技術は、なかなか困難があり、繼るものは驚かされるという。(12)は動物を模したもので、地元氏神にはよく見かける作品である。神仏に奉納用として作ったものようである。(13)は蓋石であるがこの種にも大小数多く見られる。(14)は現在能野部落の墓場に放置されている能野焼花びんである。永い年月の間風雨にさらされて破損し完全なものとしては数少ない。

以上はいろいろな器物の代表的なものとして、同一の種類で多少の差のあるものはすべて到堂することにした。長年月にわたって作られた関係上粗巾ひろく作られ、その量においても想像以上のものがあつたものと思う。ひろく深く生活のすみずみまで使われた器物、それは能野焼であり、生活を形づくっていたもの、島の生活には偉大な重物であつたわけである。



地元佐古神社に奉納されている陶器土像  
流練された技術を思わせる作品である。

したもので、指でつまきつたもの、これらには思い思いの仕業であるのか、時代の差違によるものかなど今後の研究の一つであらう。

第四は能野焼に使用した釉薬がある。他の釉薬に比して、独特の光たぐをもち一見してすぐ判別される。主成分は粘土であり、他の釉薬と同様木灰を混入し、その他に軽石、砂鉄等が豊富に散在するところから、これらを割合して作られたものと考えられる。島独自の釉薬の解明も今後にもつ研究課題であるが、開化した今日の陶業界においては、即座に釉薬の分析は可能であり、この研究は困難でない。

第五は能野焼に使用された粘土の分析である。昭和三十年鹿児島県農業試験場に地元粘土十種類を依頼しその結果を見た。それが別表である。当時窯業主任寺尾先生はつぎのようにおべている。「種子島十種類の粘土の焼成試験を行なったが、何れも癖がなく、焼物用粘土として最適である。粘土中多量の鉄分が含まれているので、他の陶器に比し、重く堅

### 三 能野焼の特徴

第一の特徴は生活に必要な器物は悉く作られたこと。前述でもわかる通り衣食住に必要なものは勿論、仏具にいたるまで(土器、墓石)作られ使用されていることである。

第二は地域に立脚したものが意図されていることである。花びんのソテツ、竹俵松等がそれであり、又島の生い島の墓場に使用する花びんはどっしりとして激動だにしない等當時陶工の意匠力に驚く。

第三はいろいろな技法が見られること。前述したごとく共同経営であつたので、個性美が強く、作品には、(○)◎◎◎◎の記号がふしてあり、ついでないものもあるが、共同窯であつた証候である。又それ故に思い思いに自由で作られた為



島の窯で、ソテツに模して作られた花びんである。この種のものは多くいろいろな形のものがある。めづれたものが出来上つたともいえる。さらに作品の底の処理を見ると、手で丹念におさえて仕上げたものと、糸等で切り離

種子島粘土10種焼成試験結果表

No.順	可塑性 (粘り)	弾力性 (土の硬)	窯焼迄の 収縮率	本焼収縮率
1	上	佳	8分	1割4分
2	上	稍々劣	5分	1割
3	中	分子粗	2分	7分
4	上	分子粗 腰強	8分	1割3分
5	上	佳	8分	1割
6	上	佳	5分	8分
7	中	稍々劣	8分	1割3分
8	上	稍々劣	8分	1割3分
9	中	稍々劣	5分	1割
10	上	稍々劣	7分	1割

注 この本焼試験はSK10番(抵抗1300度)のゼーゲルが  
正確にとらえた結果である

鹿児島県農業試験場

半であること。又粘着力大で、硬弱く橋氏千度で焼成した作品は、他地方の子二百度で焼成したものと同等であり、二百度の燃料が節約されることになる。」と以上の説から見ても粘土が条件を備えている良質なものである。

最後に出来上がった作品が素材でかざりけがなく、どっしりとした男性的な雄姿、生活にせまられた自然美が感ぜられるということである。この点について三宅先生の論説をおかりしたいと思う。(日本古陶の中で、強烈さという点では種子島が最高だろう。全国的に著名な、備前、丹波、苗代川などの古窯器よりもっと力強い古窯が南海の種子島にうずもれていった事実は大変な驚きであった。この能野焼の出現で、日本の陶器に関する考えは根本から改められなければならない。)

## 四 能野焼の保存

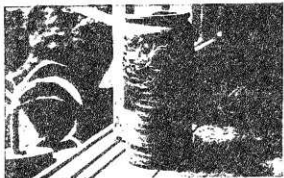
今からおおよそ二百五十年前開窯され、爾来明治三十五年迄約二百年間、島唯一の産業として栄えていた事實は、全く偉大なことである。先人の偉業を公にし、往時の作品を収集して、郷土の文化財として保存することは地元の人達に課せられた大きな責任であるといえる。この意味において、昭和四十年二月「能野焼保存委員会」なるものを結成した。能野焼

の由来、そして作品の特徵、保存の意義等について、一片のプリントにもおし、区家庭に配布し、区役員、PTA役員、学校職員、元能野焼窯元、生徒会等々積極的な協力が実を結んで、学校に収集



能野焼保存欄

されたものは約二百点、一つ一つの作品には所有者名を付し台帳に記入、各係を設けて住吉中学校を本部として、保存欄に収められている。区役員、地元有識者、元能野焼窯元、PTA役員、中学校職員計三十二名の委員で構成されている。この金は



中種子焼

毎年一回行われ、作品の保管状況維持費の検討、能野焼復興等の問題を検討する。別紙写真は保管欄であるが、学校を訪れる人はまず能野焼に目をむける。そしてその立派さに驚くことだろう。又社会科習字郷土の産物を教へ、郷土の将来における産業とのつながりにおいて、何か大きな暗示をあたえることだろう。郷土のために、みんなのために永く保存していきたいものである。

## 五 中種子焼

島内中種子町野間焼物が行われていた。現在中島友吉氏六十四才が業主である。六十年前というから明治四十年頃になる。「父につられて伊集院より渡島した。父は中種子町野間に以前から焼物を営んでいた行家という人をたよって来たのだという。焼物は日用雑器で、壺、花鉢等で依頼により土管なども製造された。釉薬も近くにある粘土に木灰を混入して使用した。上級品は本土より買入した。個人経営であったので成形に又新集めに長期間を要した。いざ焼上つても合格品は六割程度で、経費を差しひくと赤字となり生計は立

たす昭和二十年頃疎に窯を閉じてしまった。小企業で新から買入して焼く人は赤字となり生業としては困難である。」と往時を思いつ、插ってくれた。家の近くの山には當時の窯が残っており連結窯の内側は釉薬が光って見える。

## 六 能野焼復興策について

昭和十四年頃初代有山長太郎氏は能野焼に著目し渡島した。そこで粘土の調査、焼物等について検討の結果、長太郎焼窯第二工場を設置するよう計画し、窯用粘土を島外より運び、工場地を決定、その設置作業に取りか、ろうとする寸満志燃せられた。かくて工場の設置は二坂算となり、現在その地を松太郎と呼び今々に知られているが、焼物用としては、良質の粘土が無尽蔵にあり工場を誘致すれば可能なことである。ただ当面の問題点として次ぎの事項があげられる。



(中種子町野間)

手前能野焼窯元 中島友吉氏64才

奥側は伊集院中島焼物店

中央は日本窯業協会会長 志保 先生

中央は小生

第一は施設、誰が窯を作るかということ、元窯元と名のつく人はいるが、経験は全く多様な経費を

投入して始めるといった段階にきていない。地元希望は「市営の形をとって市がある程度の窯を作ってやるべきだ。」とこれにもいろいろ問題がある。

第二は陶工がいるか。粘土もあり、よし窯を作っても誰が焼くのかということである。これは昭和十四年能野焼が騒わがれた時代、地元から数名の子供が小学校を卒業して、長太郎焼に弟子入りし、現在経験者が三名程度地元へ在任しており、焼物がはじまれば自分達も協力したいといふ。然し水準の高まった現在、果して期待に添う陶工になるまで、相当の期間を要することだろう。

第三は生業として独立性があるか。この件については中種子焼が一つの教訓であろう。三宅先生はこの点について「住時一役を厚辱した能野焼の再現ということとは不可能であろう。不自由生活において、然も往時の非文化的知識の中に、精一杯力をうちこんで焼きあげた能野焼は、追いかける美でなく、追いかかれた美が内在している。用を考へ条件を思索して作られた幼稚な作品には、素朴な美がある。時代がかわり、思想がかわり、常識が発達し、科学時代の人間は如何に努力しても往時の作品と同一の美を表現することは不可能なことである。」と語る。然らば復興は「意味なし」と断定してよいのだろうか。先生はさらにことばをつづけて、「いい、粘土があ

るから焼いてみる、と気がなる所から小さな観光的なものから始めたらどうか。始めないと問題は解決されていかない。一朝一夕にことをなそうとすれば失敗にきずものだ」と。

第四は能野焼独自の軸策の研究がある。他の焼物と混同しても一見でわかる軸策の美その土成分の分解であるが、前述の通り今後の課題の一つであるが、容易に解決出来ると思う。発達した現在の陶業界においては問題にならない。中種子焼は粘土を土成分としたりと語っているが、当地域の能野焼も粘土が土成分で、それに木灰、砂鉄、軽石等の使用が考えられる。

## 七 結 び

以上とまりのないまま、に能野焼について述べたのであるが、正確な資料としては物足りなさを感じる。

開窯の時期についても正確におさえることはできなかった。この点については今後も課題として取りこんでいきたい。作品の種類は目で確かめた範囲の一部分である。このほか、いろいろな器物が作られたものと思う。

「能野焼研究」はその歴史の解明だけでなく、今後復興を如何にするか、といった問題までが研究の範囲でなければならぬ。昔をたどり、未来への橋がかけられた時、「能野焼

研究」は終ったといえる。さればこ、に物した一冊は単なる序論にすぎないのである。

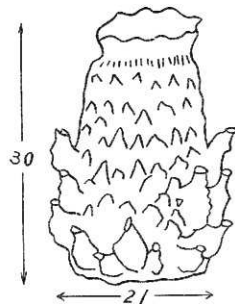
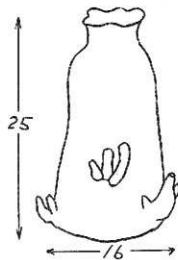
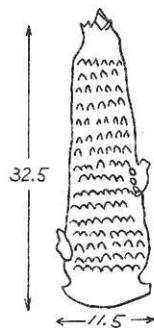
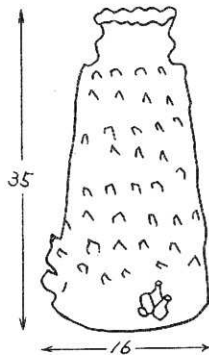
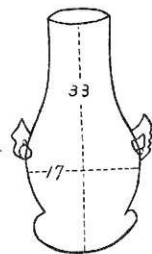
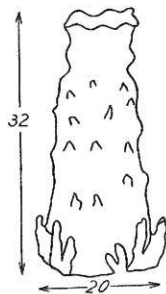
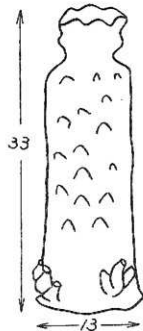
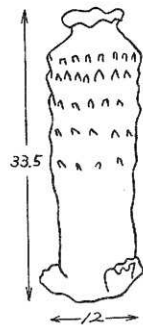
過去五十年間、地元の一員として「能野焼研究」に興味を抱き、粘土をこね、窯を作り、焼物を調べいろいろの意をはらってきた。しかしその成果は運々としてはかどうも現在にいたった。能野焼が公にしたら、各家庭の所有物が一ヶ所に保存されるようになったことは喜びにたえない。

復興は地域の問題として考へていくべきではなからうか。「地域民芸」として再興する意志があれば、日本民芸団は援助を惜しまない」と三宅先生は確約された。地元民はこのさい、更に認識を深め郷土の問題として真げんに取りこんでいく時期にいたっているといえる。

おわりごのぞみ、この研究物をつくる上に、貴重なる資料や、ご指導をいただいた方々の御芳名を記録して記念にしたものである。

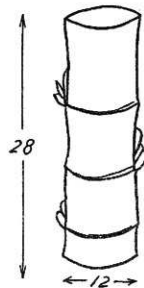
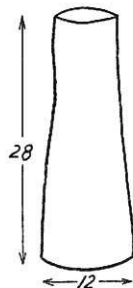
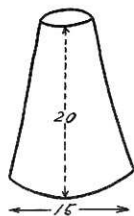
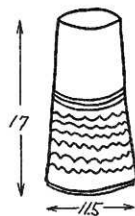
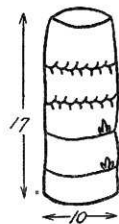
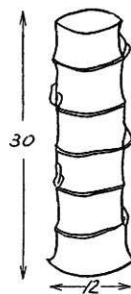
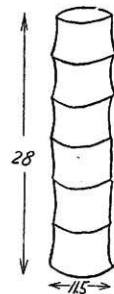
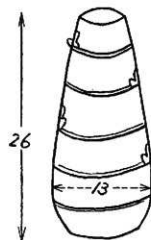
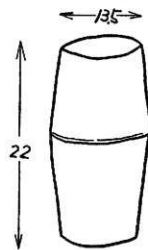
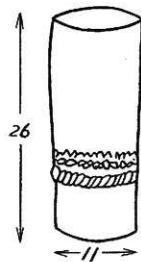
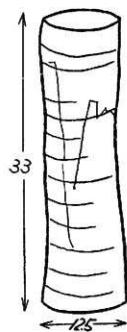
いろは順

※ 鹿児島市	新野 稷
※ 中種子町野間	中馬 友吉 (中種子焼窯元)
※ 西之表市住吉	能野 袈裟八 (能野焼窯元)
※ 西之表市	能野 七郎 (企右)
※ 西之表市新屋	鶴田 幹了 (古民芸)
※ 鹿児島市野原	名越 哲夫 (古民芸)
※ 西之表市安納	遠藤 孝助 (農業九四才)
※ 西之表市住吉	平山 武章 (西之表市役所)
※ 鹿児島市原良	寺尾 作次郎 (県蒸業試験場)
※ 鹿児島市山	有山 長太郎 (長太郎窯元)
※ 西之表市山屋敷	鮫島 宗美 (種実高校教諭)
※ 大阪府	三宅 忠一 (日本土芸館長)
※ 西之表市	下野 敏見 (種高校教諭)
※ 東京神楽坂	山本 秀雄 (東京フジ電気)



### 花びん (ソテツ)

ソテツをモチーフした花びんの形を図解。大きさは大体同じものが多いが正確さがない。手びねり法であったろう。  
数は多く見られ、形にいろいろと意匠をこらしたあとが、感得される。



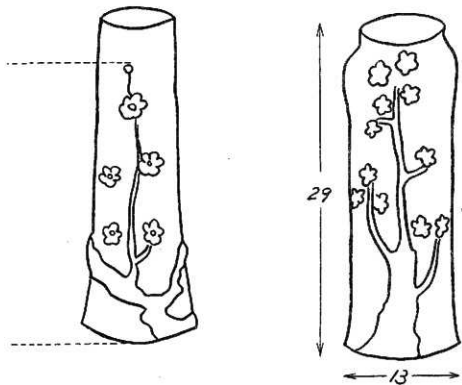
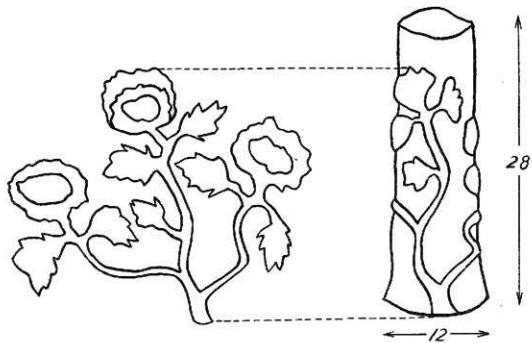
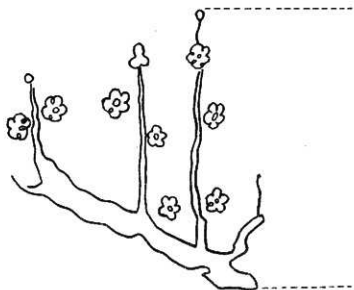
### 花びん (竹)

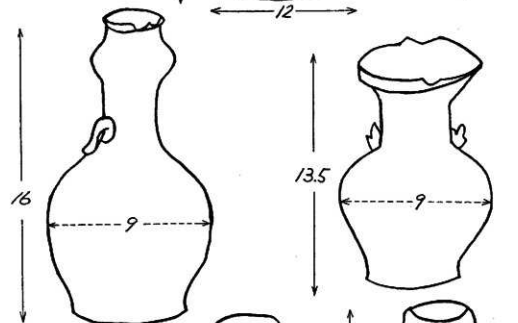
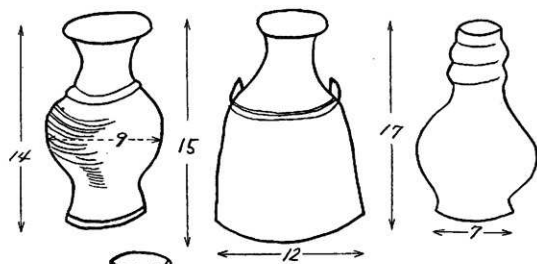
種子島原産モーソー竹をモチーフにした、種々な竹の形を表現した花びんである。つみ上げ式技法のようである。特に曲線模様のものがみられるが、これは南方形であるといわれる。

(鹿児島市在住 古民芸家鶴田先生の言)

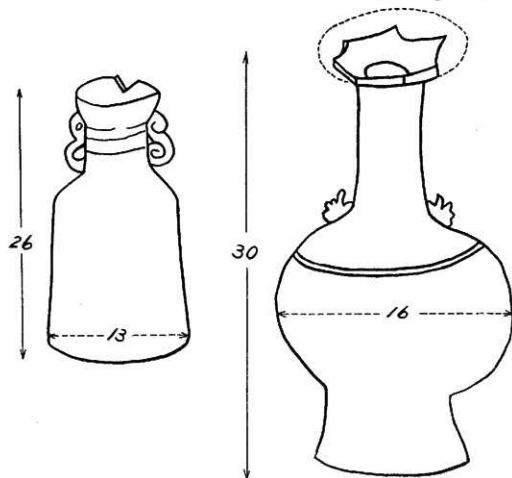
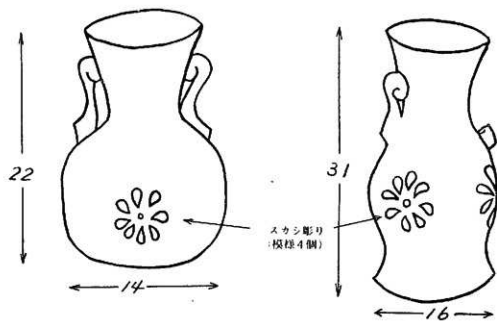
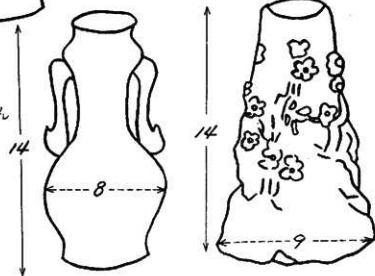
### 花びん (竹)

竹をモチーフにした花びんに、唐花模様をふしたものに。

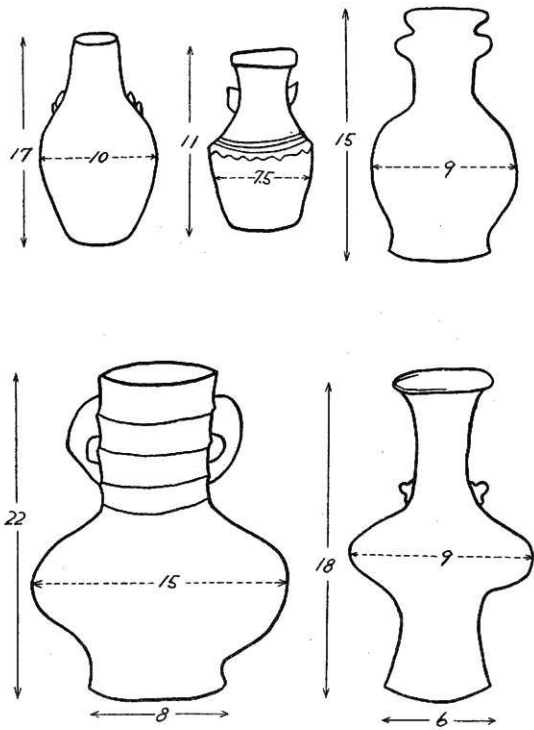
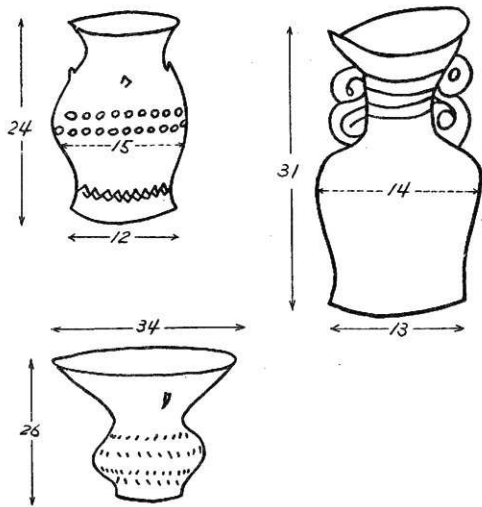




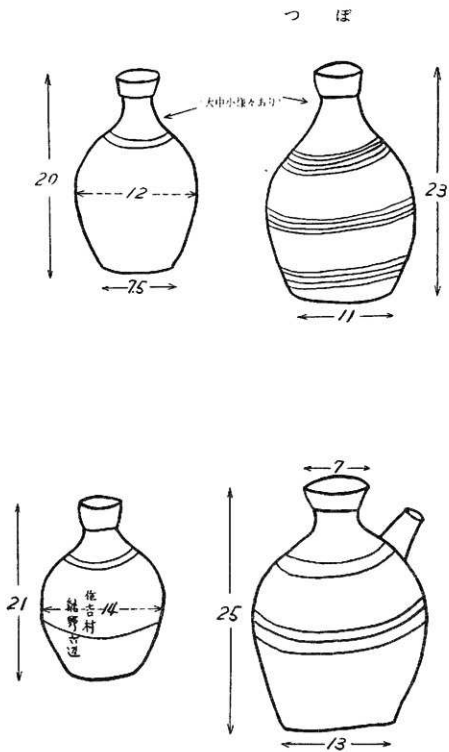
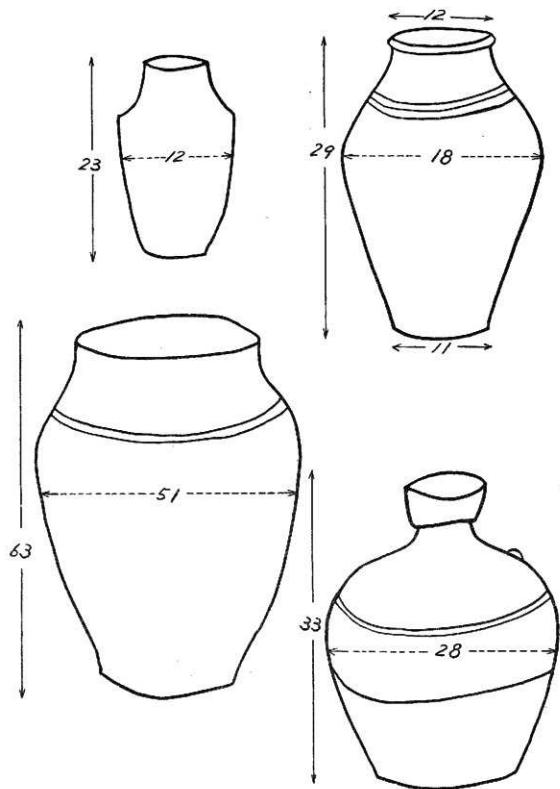
いろいろな花びん

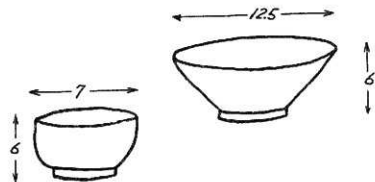
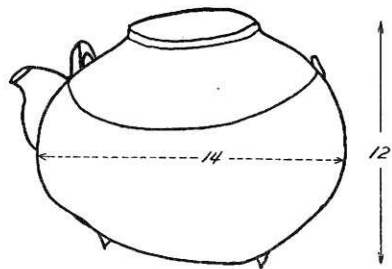
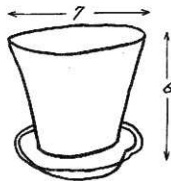
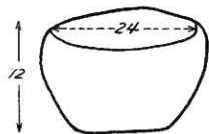
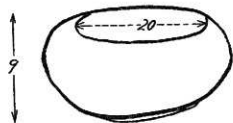
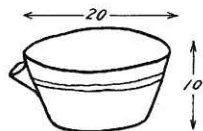


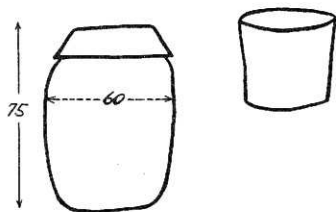
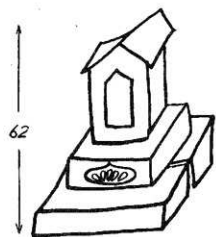
いろいろな花びん



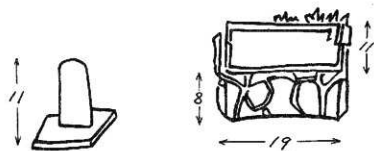
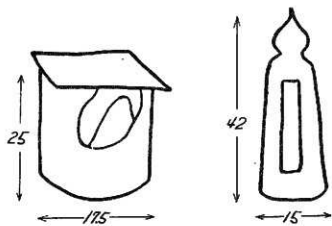
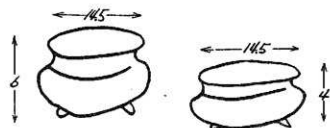


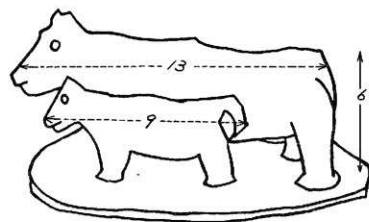
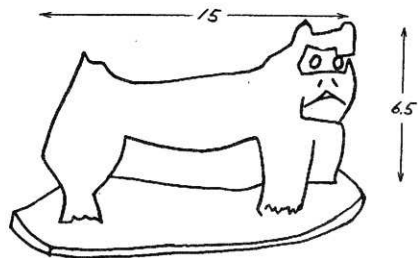
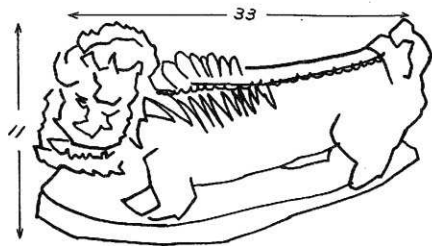






仏具





動物

